

運と徳

2021. 8. 2

いつだったか。義理の妹、すなわち私の妻の妹から、「教育で一番大切なものは何なの」と聞かれたことがあった。私は、即座に「徳」と答えた。妹は、最初「得」だと思ったらしかった。その「得」ではなくて、この「徳」だと説明した。妹は、わかったようなわからないような顔をしていた。少なくとも腑に落ちた様子ではなかった。

「徳」という言葉はよく聞く。だが、それを説明しようとするとは簡単ではない。経営の神様とうたわれた松下幸之助さんに、「経営者の条件とは何ですか」と聞いた人がいた。すると、松下さんは、真っ先に「運が強いことや」と答えた。その人は、矢継ぎ早に、「運を強くするにはどうしたらいいですか」と聞いた。松下さんが言うには、「徳を積むしかない」とのことだった。

松下さんは、「徳」については、このようにおっしゃっていた。

徳というのはAさんに掛けて、Aさんから返ってきたことは一回もない。だからと言って、Aさんに徳を掛けなくていいかというところではない。どこから返ってくるか分からないから、会う人それぞれに徳を掛けなきゃいけない。

では、「徳」とは何かということになる。これは、なかなか難しい問題である。辞書で調べてみると、やはり、わかったようなわからないようなことが書かれてある。私が、今、答えるとなると、「自己の最善を他者に尽くし切る」となるのか。したがって、かなり高度な難しいこととなる。徳を積むとは言うが、並大抵のことではない。

学校ではよく、「知・徳・体」あるいは「知育・徳育・体育」という言葉を使う。知育と体育は、ある程度データに出てくる部分があるため、見えやすい。高校入試や運動部の大会で、結果として出てくる部分もある。

一方、徳育はというと、データがあるわけでもなく、試験や大会があるわけでもない。非常に見えにくい。知育と体育は力を入れやすいが、徳育となると、どうも力を入れにくい面がある。

知・徳・体は、どれも大切なのだが、そのバランスが重要である。意識して徳、徳育に力を入れるくらいでちょうどよい。実は、目には見えないものほど大事なものである。徳は、どこから返ってくるか分からないから、会う人それぞれのことを考える。非常に難しい徳ではあるが、徳のはじめの一歩となれば、人を思いやる心、すなわち思いやりとなるのか。